

ある日の育児日記から

(70)

佐藤 和代



ここ何日か、圭が「こわい」と言ってるなかなか寝付けない夜が続きました。「何がこわいの」「何かわかんないけどこわい」。手を握ったり、抱いたりして寝かしていましたが、そのうち有まで「こわいよー」としがみついできて、私は二人が寝付くまで身動きもできない状態でした。

でもある晩、何げなく、「お母さんもこわがったことあったな」と話したら圭は目を見開きました。「ほんとう? 何で?」「あのね、目をつぶるともやもやしたものが見えることがあるでしょ。あれがこわくて、目をつぶってられなくて、ずっと

眠れなくて、おばあちゃん困らせたのよ」。そう、今思うとただの残像なのだけど、一時期本当にこわかったのです。

圭と有はその話を何度もせがんで、そして、なぜかとても素直に眠ってしまいました。

あらら、こんなに簡単なら、もっとはやく話してやればよかった。二人とも、こわいと思ってること自体が、不安だったのではないかしら。自分だけじゃなかったんだ、と思ったらそれで落ち着いてしまったのね。

よし、このての話ならいっばいできるわよ。お母さんは、こわいこと不安なこと嫌いなこと山ほどある子だったんだから。…なんて、全然自慢にならないか。

